

## 企業の迅速な経営判断に役立つ BIツールを活用した情報の「見える化」

さまざまなビジネスの現場で「見える化」が注目され、BI(ビジネスインテリジェンス)ツールに対する企業の関心が高まっています。こうしたニーズに対応するため、当社では、BIツール「QlikView / Qlik Sense」の販売に加え、自社導入のノウハウを生かしたサービスを提供し、見える化の推進・迅速な意思決定を支援します。

### 見える化の現状は

企業を取り巻くビジネス環境の多様化、複雑化に対応するため、今まで以上の迅速な意思決定が求められ、「見える化」の必要性が高まっています。「見える化」は企業が各部門で日々蓄積しているデータを可視化することで、これまで気づかなかった事実を把握し現状を正しく捉えて、より精度の高い意思決定を行い、売上げの向上や業務の効率化に役立っているなど、企業のスピード経営実現の鍵となっています。

これまでの「見える化」では、先に表示する情報を決めておき、Excelのグラフ機能などで目的に応じたレポートの作成や、従来のBIツールを利用した定型レポートの作成で対応されてきました。このようなレポートでは、常に同じ分析手法であるため、本来注視すべき点に気づくことができず、その時に必要な視点で分析ができないなどの問題点がありました。また、「このような切り口の情報がほしい」といった要望に対しても、現場ごとの要求に応じたデータの抽出、整形が発生したり、新たにデータウェアハウスやデータマート<sup>(注1)</sup>の設計、製造が必要になり、コスト面で負担

が増加するなどの問題点もありました。このような状況により、タイムリーな情報の提供がされずに、ビジネス上の意思決定でデータが有効に活用されていないケースが多々見受けられました。

### 見える化の問題点を解消するには

これら「見える化」の問題点は当社でも同様に発生しており、1年前にQlikTech社が開発した「QlikView / Qlik Sense」を導入し、見える化を実現しました。

QlikTech社の「QlikView」は、1993年に登場したBIツールで、世界1,700社のパートナー企業と100カ国以上で36,000社を超えるユーザーを持っています。

「QlikView」は、関連性のあるデータをつなげていく「連想技術」、データをメモリ上に展開することで高速レスポンスを実現する「インメモリ技術」、さまざまなベンダーやデータサプライヤーのデータソースを、アプリケーション内で混合して利用できる「マルチデータソース」といった特徴をもつBIツールです。

「Qlik Sense」は、2014年に発売が開始されたBIツールであり、一般的なビジネスユーザー向けで「データ分析を本業としな

い一般のビジネスパーソンが、パワーユーザーの支援を受けることなく、自らデータを操作・探索し、ダッシュボードを作成して自分で使用する」という使いやすさを最優先とした特徴をもっています(図-1)。

これまでのExcelやBIツールでは、分析の視点が固定され自由な発想での分析ができないという問題点がありました。「QlikView / Qlik Sense」では、ユーザーが画面をクリックしたその瞬間に計算し、「見

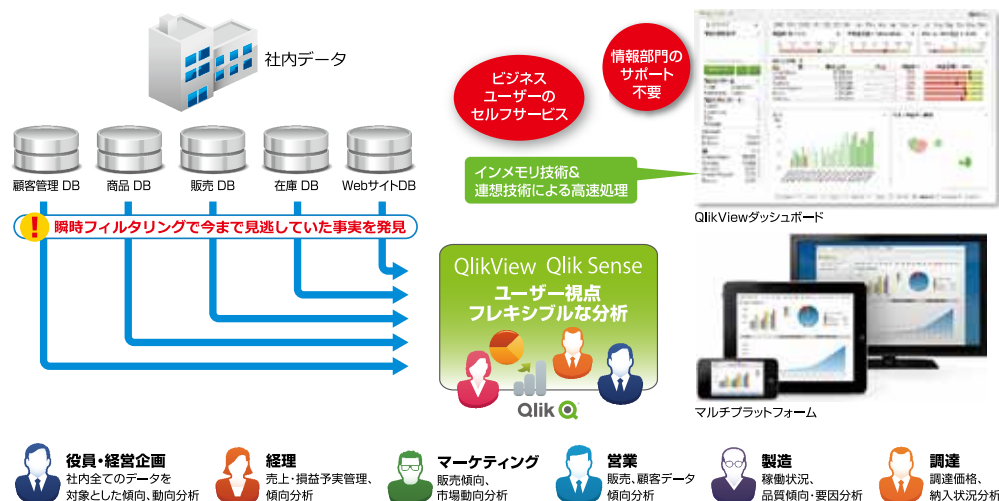


図-1 QlikView / Qlik Senseの概要

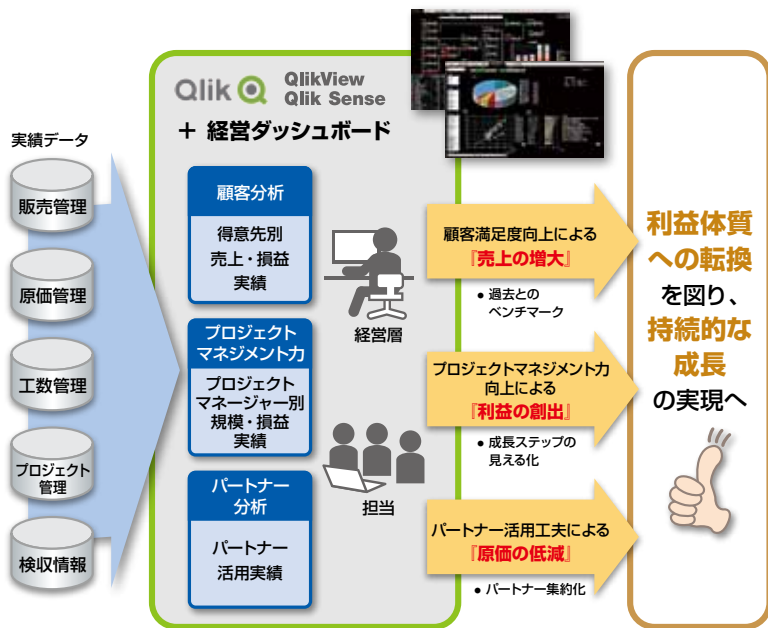


図-2 経営分析の概要

たい情報を」「見たいときに」「見たい形式で」表示することができます。顧客や製品、地域、時間など、分析をその時に必要な視点で行うことにより、ビジネスの変化に対応するスピードと柔軟性に優れたBIツールとなっています。また、データの取り込みや表・グラフの作成が簡単にできるため、人手による月次の集計・分析レポートの作成や、従来のBIシステムでのキューブ<sup>(注2)</sup>やデータマートの設計、製造にかかっていた工数が削減できます。

## 当社の事例

経営に関する情報を集め、事業の活動状況(売上・利益)を一元化した「経営の見える化」や、プロジェクトごと、取引先別、担当者ごとに分析できるよう現場向けの「生産の見える化」を運用しています(図-2)。

「経営の見える化」では、経営者向けに組織別に売上高、原価、粗利、売上総利益、生産高、製造原価などの情報より、月次損益状況の現状を表示して分析を行います。また、過去4四半期の情報を表示して損益状況の変動を分析します(図-3)。

経営に関する情報を格納しているデータベースに接続することによって、従来はあらかじめ決められた表示形式でしか見ることができなかった情報が、自在に「見たい情報を」「見たいときに」「見たい形式で」表示ことができ、迅速かつ適切な経営判断に役立っています。

「生産の見える化」では、現場向けにプロジェクトチャート、得意先チャート、パートナーチャートを作成し、それぞれプロジェクト別損益実績、得意先別取引実績、パートナー別発注実績を表示して分析をしています。これらの分析シートは互いに連動し、プロジェクトチャー

トで選択した条件で得意先チャートを参照するようになっており、利用者は分析したい対象を、それぞれのチャートの切り口で分析することができます。

見える化を実施したことにより、俯瞰した視点から全社の状況および各事業部の状況を確認することができ、現場においてはビジネス形態やプロジェクトごとの問題点にいち早く気づくことができるようになりました。また、これまで手作業で作成していた月次資料を「QlikView」で作成することにより、作業時間を大幅に短縮し、作業の効率化を図ることができました。

これらは、当社のノウハウとともに、システム開発系や建築・不動産系の業種に向けたテンプレートの1つとして、同じような管理体系の会社への導入提案をしていきます。また、他業種のお客様に対しては、テンプレートを変更、拡張することで展開できるようにしてい

ます。

当社は、単にツールを提供するだけのベンダーと異なり、これまでSIベンダーとしてあらゆる業種・業態のお客様向けのソリューションを組み合わせてきた経験やノウハウを生かした多彩な切り口のきめ細かな対応を、「QlikView / Qlik Sense」アプリケーションを用いて行っています。

また、「勤怠Navi」の労務管理の情報分析や機械学習による予測分析など、当社ソリューションと組み合わせることによって、いろいろな切り口でデータの見える化を可能にしています。

今後、さまざまな業務に向けたテンプレートの拡充を進め、企業の見える化のあらゆるニーズに対応していきます。

(SIソリューション事業部 佐藤 幸宏)

(注1) データマート(Data Mart) : データウェアハウスの中から特定の目的に合わせてデータを抜き出したもの

(注2) キューブ(Cube) : OLAP(OnLine Analytical Processing)分析を行うためのデータベース



図-3 経営の見える化の画面イメージ